しらうめようちえん
園だより 2022年度 第2号
白梅学園大学附属
白梅幼稚園
2022年5月30日発行
小平市小川町1－830

ただいま！ 預かり保育 にじ組

「ただいま！」

幼稚園の教育時間が終わると、各クラスから続々とにじ組の子どもたちがにじ組のお部屋へ「帰って」きます。工作や虫、草花など、お土産を片手に帰ってくる子もいます。

子どもは入室するとまずは着替えをして気持ちを切り替え、横になって体を休めます。

４月から入った年少組もすっかり慣れ、着替えるとすぐに布団に入りいつの間にか夢の中へ。

目を覚ますとお楽しみのおやつの時間です。「今日は何のお菓子かな？」眠い目をこすりながら起きてきます。年長組はなかなか目が覚めない小さい子を優しくトントンと起こしたり、大きなタオルをたたむのを手伝ってくれたりします。

そして、おやつを食べ終わるとそれぞれ好きな遊びへ向かいます。クラスにもある井形ブロックはにじ組でも大人気です。広くつなげて小さなぬいぐるみのお家にしたり、たくさん積み上げて高さに挑戦したりします。ままごとコーナーでは、レースの布を身にまとったプリンセスたちのパーティーが始まります。傍らでは、お絵描きやぬり絵、パズルをするなど黙々と遊ぶ姿も見られます。クラスや学年の垣根を越えて遊んでいます。大人数の時は園ホールも使って遊びます。年長組が広いスペースを思う存分に使ってカプラを積み上げたり、レールを長くつなげたりしてダイナミックに遊んでいます。

夕方には一度みんなで集まります。そこでお名前呼びして絵本を見ながら静かに過ごします。

このように、にじ組の生活も２か月が経ちました。慣れてきたところで園庭にも出て遊ぶ時間をもちます。また、長期休みには学内をお散歩したり、夏休みには水遊びをしたりします。

降園時間はご家庭それぞれの時間になります。お迎えにいらした保護者の顔を見て、笑顔になる子、照れてはにかむ子、時には遊びに夢中で「まだ遊びたい！」と言い出す子もいます。子どもと保護者の方の安心された姿を見て、私たちスタッフもホッとします。

このにじ組が子どもたち一人ひとりにとってホッとひと息つき、安心できる場所でありたいとスタッフ一同願いながら過ごしています。　（教諭・玉井三津）

対　　象	白梅幼稚園在園児
保 育 日	月曜～金曜(長期休暇中も実施。祝日等を除く)
保育時間	下記の時間内で保護者が希望する時間 ・7:30～保育開始(9:00)まで ・保育終了後～18:30 まで ・長期休暇期間　7:30～18:30
保育内容	自由な雰囲気と家庭的な温かさのある生活のなかで、好きな遊びをして過ごす。おやつあり。
保 育 者	にじ組専任の保育者がシフトを組んで担当。
形　　態	年間契約・月ぎめ・日ぎめ

誰かが始めて遊びが広がる 年少 つくし組

クラスでくらす

18名の子どもたちと共につくし組の生活が始まりました。初日から予想以上に、子どもたちが保育室にある遊具や道具を手に取り、遊んだり、描いたり、組み合わせたりしています。18人が同じクラスで過ごしていますが、4月はまだまだ自分のことで精いっぱい。でも、誰かが遊び始めたことがきっかけで、その遊びが広がっていく、という姿もあります。自分のことで精いっぱいではあるものの、18人の子どもたちが互いに影響を与え合っている、ようにも思えます。

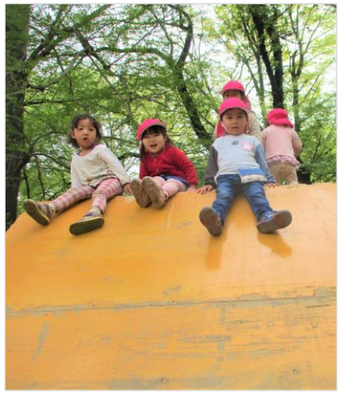
ままごとは、好きな子が多く、料理を作って先生に食べてもらうことが大好きです。いつしか沢山のコックさんが現れたので、机や台をキッチンにして、色々な所で調理するようになりました。

しばらくすると、「ピクニックしようよ～」という声に誘われ、机にご馳走を用意したり、車で移動したりするようになりました。椅子を並べて、車に見立てますが、ハンドルがありません。ハンドルの定番はフープですが、ないことに気づいた子が、近くにあったお皿をハンドルにすると、同じように皿や丸いカゴで代用し始めます。

ハンドルに見立てやすいフープ「そのもの」でなくても、別の似たものを見つけて代用していくこと、またそのことが互いに影響し合っていくということに驚きました。

園庭では、保育室前の砂場だけでなく、築山や年長の砂場にまで顔を出している子もいます。築山に行ってみると、おそるおそる、でも好奇心を刺激されて、登っている子たちがいます。

築山の頂上に登ると、上から見える景色に達成感を感じたものの、次の瞬間、「どうやって降りよう……」と不安げな表情になります。滑り台を使うには、角度が急すぎます。反対側の階段は、怖い……。タイヤ階段なら行けるかな、と意を決して降りてきます。



保育者が手を貸そうとしますが、その声をさえぎり、「できるよ！」「怖くない！」と、ゆっくりゆっくり降りてくることができました。T ちゃんの「できるよ！」という声は、幼稚園で初めて聞かれた、大きくて自信にあふれた声でした。　（教諭・西井宏之）

交通遊園をつくりたい

年長 たか1組

クラスでくらす

年長の生活が始まって二日目、「交通遊園、つくりたいんだよね～」とＡちゃんがつぶやきました。その声に、「府中にあるよね。ゴーカートがあってさ～、いいじゃん、やろうよ！」と意気投合したＢちゃんとの二人から、交通遊園づくりがスタートしました。「まずは、設計図」と言って絵を描きます。「本当に乗れる（動く）車とか新幹線をつくりたいよね」「この中では、映画が見られることにしよう！」「信号もつくらないとね」「あと模型もいるよ」と、二人は勢いづきます。設計図が完成すると、すぐに作業に取り掛かりますが、いかんせん二人でやっていることです。自分たちが思っている以上に、進まなくて、困っていました。

その次の日のたか１タイムで、クラスのみんなに紹介することになりました。「僕たちは、交通遊園をつくっています」「本当に乗れる電車とかつくろうと思って」としばらく内容を話し、つくったものを披露しました。すると、クラスの仲間から「二人だけでやっているの？」「大変じゃない？」「俺、手伝おうか？」などと声がかかりました。二人はもう嬉しくて、「ありがとう！」と期待に胸を膨らませている様子が見てとれました。

しかし翌日、手伝うと言った子どもたちは、やってきませんでした。おそらく、何から手伝っていいのかわからなかったのでしょう。一緒に取り組んでいたＡちゃんは今日はお休み。Ｂちゃんは「じゃあ、今日はずーっとつくりたかったジオラマをつくろうかな。ほら、学校のお姉さんたち（清修の生徒たち）がテレビに出たでしょ？ああいうジオラマ、つくりたいんだよ」と大きな段ボールをもってきて一人作業を始めました。すると、「何やっているの？」と、手伝うと言っていた子どもたちが集まってきたのでした。何か楽しそうなことが始まると思ったのか、一人でやっているＢちゃんの様子を見てやってきてくれたのだと思います。Ｂちゃんからイメージを聞き、早速集まった４人でジオラマづくりが始まりました。「大きい山つくって、トンネルつくろう！」「電車は何でつくる？」「牛乳パックのサイズじゃ大きいね」「わさびの箱くらいがちょうどいい」と、ジオラマにピッタリのサイズの箱を探し出し、いろいろな種類の電車をつくり始めました。見つけたアイスの棒は線路になりました。Ｂちゃん一人で始まったジオラマづくりは、最終的に４人が関わり、盛り上がりを見せています。

彼らの思い描いている交通遊園が完成するまでまだまだ時間がかかりそうですが、一つ一つ話しあいながら自分たちが思う世界を仲間と共につくりだしています。自分の夢を仲間と共に叶えていく生活がここにあります。一人から二人、二人から三人とつながっていく思いを大切に、子どもたちの「やりたい」を実現していきたいと思います。（教諭・深田美智子）

研究室から

書物のなかの想像力

鬼頭七美
白梅学園大学子ども学部准教授

本を読むことは想像力の涵養につながる、ということが一般的によく言われています。人間関係の場合であれば、他者の気持ちを考える想像力とか、他の人を思いやる気持ちなどといったことを語るときに、この想像力という言葉がよく使われます。しかし、本を読むことの想像力という場合、それはいったいどういうものなのでしょうか。

例えば、宮沢賢治の童話集『注文の多い料理店』という作品を取り上げて考えてみます。

この『注文の多い料理店』には「水仙月の四日」という作品が入っています。この作品に出てくる雪童子（ゆきわらす）は「べろべろまつ赤な舌を吐きながら」歩く「二疋の雪狼（ゆきおいの）」を連れて、「白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔を苹果（りんご）のやうにかがやかしながら」登場します。一人の人間の子どもが雪のなかを歩いているところへ、この雪童子は雪婆（ゆきば）んごに命令されてひゅうひゅうと吹雪を起こし、子どもを雪のなかに埋もれさせますが、なぜか雪童子はこの子どもを気にかけ、最後には助けます。雪童子の言葉は文字で表現され、我々読者にはわかりますが、作品内の人間の子どもには雪童子の言葉が聞こえていないように描かれます。雪童子が吹雪を起こしている間、雪童子はひとつのやどり木の枝を人間の子どもに与え、人間の子どもはそれを持ち続けて雪に埋もれていきます。やどり木を介して雪童子と人間の子どもとの間に、心の奥深いところで何らかの交流があったことが示唆され、ここから、深遠な主題を読み取ることも可能でしょう。しかし、それよりも、雪童子や雪狼の姿形や動作を描写する言葉を、我々読者がイメージ豊かに想像できるかどうかが、この物語の深い理解に至るためのカギになってきます。

この童話集にはほかにも「鹿（しし）踊りのはじまり」という短編が入っていますが、これは嘉十という人物の耳に、あるとき急に鹿の声が聞こえてくるというお話です。嘉十が落とした手拭いの周りを、恐る恐る「五、六疋」の鹿が集まってきて、あれは何だ、生き物か、食べ物かと言い合いながら、手拭いを確かめるというものですが、一疋の鹿が近づいていき「首をあらんかぎり延ばし、四本の脚を引きしめ引きしめそろりそろりと手拭に近づいて行きましたが、俄にひどく飛び上がつて、一目散に遁げ戻つてきました」というような動きが繰り返し描写されます。鹿を身近に見る機会のない読者は、おそらく飼い犬や飼い猫の類似の動きを思い浮かべながら、見たことのない鹿の動きを想像することと思います。

本を読む際の想像力とは、言葉の文字列から情景を思い浮かべ、その想像した世界を自らにとっての日常と切り離したり、つなぎ直したりしながら、その意味を考えることであると言えます。言葉のひとつひとつを大事に扱い、意味を捉え、読み進めるということが、豊かな想像力の開花を約束すると言えるでしょう。